

東京バッハ合唱団 月報

[第 696 号] 2020 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 696

June 2020

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

人間と言葉

大村 恵美子 (主宰者)

世の中には、あまり多くを話さないけれど、とても感じの良い、魅力のある人々があります。そんな人々を見ると、しあわせですが、お互いにそれ以上のつき合いはできないものです。家族とか友人になるには、やはり、一緒にすごして、話しながら何かを行なうということがあるでしょう。

私たちの合唱団も、まず私が、ドイツ語でつくられているバッハのカンタータを、この日本で、他の人々とも一緒に味わいたい、という思いから、始めたわけですが、その存在を知って、はじめの頃は、何人かの欧米人も入って来ました。残念なことに、アジア人は定着していません。しばらく通っていた声楽家志望の中国人青年、また韓国人の女性も何人かのぞいて、また来ると言いながらも、現れなくなりました。何事をするにも、お金がかかると続かないことが多く、外国人にも、学生などは無料にしたけれど、大人には一般と同じ団費があるという、「聖歌隊だとただなのに、バッハの教会音楽を歌う合唱団にお金が必要！」と、来なくなりました。

外国人が、東京でドイツの合唱音楽を、日本語でも歌おうというのはうれしいけれど (バッハを歌うところは他になかった)、どのようなメリットを感じてなのだろうか、と私の方も考えましたが、結構長続きする人もいました。オーストラリアの女子学生は、野尻湖合宿にも参加、かなりエンジョイしていたようだし、私がパリでモリエールの芝居をみた時に識り合った神学生が、親友にすすめて、東京にこういう合唱団があるから、他の国でなくて日本に移住するようという事で、現れたのが、やはり神学生のガブリエル (ガブさん) でした。数年後に、団員の日本女性と結婚して、かわいいお子さんまで得られたのに、離婚、そして修道院に復帰、若くして残念なことに他界されました。たのしい方でみんなに愛されていました。

私は、この国に来る外国人には、なるべく幸せにすごしてもらいたいとねがっています。それにはやはり、言葉をかわし合うことが大事なのです。たとえば、私もドイツで、紹介されたばかりの人が、「あした〇〇時に、〇〇で会いますから、来るように」というふうな



■初夏の花々①: スイレン (p2,3 にづく。写真:千葉光雄・団員)

調子で、にこりともせず指示するので、とっつきにくかったのですが、そのうち、心はやさしい人なのだとわかってくる、ということが、何例もありました。その点、フランスやイタリアの人たちは、気さくでオープンで、交友しやすいと思われたのですが、同じ日本人でもいろいろですから、人とのつき合いには、慎重にならざるを得ません。私の父は、アメリカで教育をうけて、数か国語は話せて、周りの人々から「時さん、時さん」(時太郎)と慕われたようですが、やはり、お互いにすぐに通じる言葉が、人格だけでなく、人と人との間をつないでくれるのです。

こんなことを、今さらのように書くのは、私が外国で友人となった何人かの外国人に、今でも大変な苦勞をして文通しなければならないからです。よく日本人は、おもてなしがいいと言われるけれど、じかに接している場合は、ほほえんだり、やさしい態度なりで、ことばなしにも好意を示せるのに、手紙を書くとなると、いちいち言葉づかいに悩まされます。実際、私たちの合唱団が、これまでに5回も実りの多い海外巡演旅行が出来たのも、多くの知名な外国人たちに知己を得たのも、みんな、その時々、通訳して相互理解を助けてくださる方々に恵まれたからでした。私の文通だけでは、何も進められなかったはずです。

今も、ドイツで知り合った友人づきあいのイルゼや、何人かの大学の先生方が、写真を添えた手紙をくださるので、思い余って、いまだに、長年ドイツで過ごされた森永毅彦さん (バス団員) におねがいで、私の手紙をドイツ語に訳していただいていたのですが、合唱

月報 2020 年 6 月号 CONTENTS

- ・待ち望みたる 喜びの光 —BWV184— (大村恵美子) …p. 2
- ・オンライン復活祭のメールグループ (伴奏者/団員/事務局) …p. 3
- ・2021 年前半の上演候補曲 解説 [2] (大村恵美子) …p. 4

団の公用文ならまだしも、私だけの個人的なつき合いにまでとなると、もう申しわけなく、できないものは、やめなければ、とつくづく思うこの頃です。私も直接の話し合いは、なるべく努力して、馴れようとしてきましたが、文章は、いくらがんばっても、もう駄目です。中途半端な能力に困惑する人間の悩みは、他人をまきこむなら、やはり諦めるべきだと思います。

長い間、面倒なことをあれこれお引き受けくださった森永さん、今後もまだ、バッハの歌詞の意味などについてお考えを仰ぐこともあるかと思いますが、私個人のドイツ語訳はもう懇願することはありませんので、これまでのご迷惑をお許しくくださいますように。ありがとうございました。

話しは、変わりますが；

待ち望みたる 喜びの光 (カンタータ 184 番) Erwünschtes Freudenlicht BWV 184

ことしの年明けから練習を始めた曲に、カンタータ第 184 番《待ち望みたる 喜びの光》があります。聖霊降臨節（ペンテコステ）の礼拝のための作品で、バッハのライプツィヒ時代初期の初演ですが（1724 年 5 月 30 日）、土台になった曲（BWV 184a）は、すでに数年前のケーテン時代に成立していて、音楽の大好きなレーオポルト侯の誕生日か新年の祝賀用に作曲され、演奏されたようです。後のこの宗教稿も、ケーテン宮廷の華やかな空気をそのままに伝えて、実にきらびやかな作品に仕上がっているのです。

フルート 2 本の素早い音の輝きから、曲は開幕します。この光に導かれて、テノールが〈待ち望みたる喜びの光、まきびとイエスよ〉と語り出すという仕掛けは、聴く人のこころを、わくわくさせずにはおこななかったはずです。そして、われわれも、この 42 小節の長いレチタティーヴォと、つづくソプラノ・アルトの心浮き立つ二重唱〈愛でられたる 幸なる群〉（これも演奏時間 10 分におよぶ）から練習を始めたのですが、そのすぐ後に、みんなで声を合わせる事が禁じられるとは、夢にも思わなかったことです。

■初夏の花々②：シモツケソウ（下野草）



これまでも、月報紙上で少しずつ、みなさんにもお伝えしてきましたが、3 月の初めから、コロナ禍のために集会の自粛要請があり、5 月初旬の現在、団員も全員が自宅での自習を強いられています。ふだんの練習会場は都内の 2 つの教会で、その 1 つ、団員でもある小海さんの牧する荻窪教会は、「礼拝も諸集会も総会も掃除も、5 月 31 日のペンテコステまで中止」と伺いました。この連絡を、小海さんは苦渋の思いで伝えてきました。人の集まりがペンテコステまでは中止、とはなんとも逆説的ではないでしょうか、と同時に、またなんとも意義深いことがらか、とも思えます。

「ペンテコステとは何か」。去年のこの季節の月報に、小海牧師が、まさにこのタイトルで、184 番のカンタータにも触れながら、解説を書いていますので、もう一度、読み返してみてください（No. 683、2019 年 5 月号、p. 2-）。

ペンテコステについての聖書の記述は以下のとおりです：

五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語るままに、他国の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国出身の信仰のあつい人々が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、誰もが、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられた。人々は驚き怪しんで言った。「見ろ、話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうして、それぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。

（使徒言行録 2；1-13）

小海さんは、文章のなかで、<「聖霊降臨祭」では〔バベルの塔の物語とは〕逆に、「多言語」の母語で神の業が語られて、皆が「一つ」とされていったというのです。私たち東京バッハ合唱団の「母語でバッハを歌おう」というこだわりの原点がこの「ペンテコステ（聖霊降臨祭）」の出来事にあるではありませんか>と語っていらっしやいます。

そうなのです。「人間と言葉」という大きな話題のなかでは、どうしても、この出来事に触れざるを得ません。声をかけ合うことさえ怖れられる、このコロナ騒動のなかで、私たちは、いつも以上に積極的に言葉を交わしあう必要があります。春以降、月報の 3 月号、4 月号、5 月号をみなさんに、郵送でお届けしました。多くの団員のみなさんから、メールや手紙で、反応をいただきました。お便りありがとうございました。

今年のペンテコステは 5 月 31 日です。この日曜日に、《待ち望みたる 喜びの光》の到来を信じましょう。184 番の初演から、ほぼ 300 年目の初夏の陽光が、きょうも外には降りそそいでいます。<ア>

オンライン復活祭のメールグループ

2020/04/12、事務局

団員のみなさま、
復活祭を迎えました。おめでとうございます。（以下、
月報4月号をお読みください）
昨日、①新しい月報が入荷しましたので、みなさんのお手許へ発送しました。一両日で届くと思います。②最新の団員名簿、③課題曲の歌詞解釈の手引き、を同封しました。お受け取りください。とくに、カンタータ4曲の歌詞、このときあたり、心に響きます。再開＝再会を楽しみに、お元気で、前向きにお過ごしください。

2020/04/12、中澤未帆（伴奏者）

イースターおめでとうございます！
このような状況にもかかわらず、ご連絡のお手数をいただきまして、またたくさんのご配慮をくださいましてありがとうございます。1日も早くこの状況が改善して、東京バッハ合唱団のみなさまとご一緒させていただけることを楽しみにしております。月報についてのお知らせもありがとうございます。後ほどゆっくり拝見させていただいて、学びの時間を作りたいと思います。東京バッハ合唱団のみなさまの健康がどうか守られますように！

2020/04/12、千葉光雄（団員：バス）

連絡ありがとうございました。いつもお世話様です。今年の復活祭はヨハネ受難曲を聞きながら過ごしています。月報楽しみにお待ちしております。早く大きな声でバッハをみんなで歌いたいですね。くれぐれもお身体に気をつけてお過ごしください。それではまた。

2020/04/12、田尻明葉（伴奏者）

お元気で過ごしてはいかがでしょうか。バッハの大好きな皆さまのこと、きっと練習の中断は苦渋の決断だったことと思います。でも健康でなければバッハは歌えないですし、また安心して歌えるようになるまで、しばしの辛抱ですね。楽しい夏の行事の中止もとても残念ですが、またみなさまにお会いできるのを楽しみにお待ちしております！どうか、お気をつけてお過ごし下さい。月報も楽しみに読ませていただきます！

2020/04/13、加藤剛男（団員：バス）

本日、月報その他をお送りいただきありがとうございました。巻頭言・大村恵美子先生の記事「よみがえりの春」に“私たちが、今夏の課題に選んでおいた4曲の新しい教会カンタータ（BWV 78、BWV 93、BWV 113、BWV 184）は、びっくりするほど、この摩訶不思議な世界情勢に処するにピッタリな内容なのです”とあります。心して自習練習で取り組みたいと思っております。



ご夫妻とも、くれぐれもお身体、ご自愛ください。

2020/04/14、白井昭子（団員：アルト）

イースターおめでとうございます。4月月報と名簿と解説書頂きました。ありがとうございました。早速読ませていただき、解説書を読みながら、練習を始めました。とても心に入ってきて、歌えます。まだ、始めたばかりですが…。ありがとうございました。コロナ蔓延の中であって、なかなか練習に行けません。独りで少しずつ練習をしております。また、教えて頂ける時を楽しみにしています。

2020/04/15、小口真知子（団員：ソプラノ）

一昨日、月報等いただきました。テキスト解釈の手引きには先生の赤ペンも加えられていて、先生の温もりが感じられて嬉しいです。再開時に備えて勉強いたします。ゆっくりと歌詞を読みますと本当に心に響きます。安心して歌える日が来るまで、備えを怠らずに心静かに待ちたいと思います。月報の先生のお元気なお写真を拝見して安心いたしました。どうぞお元気でいらして下さい。

2020/04/15、田所 功（団員：テノール）

4曲のカンタータの歌詞、私も心に響きました。人と人のふれあいができない中でしたが、いつも以上に神様とのつながりを強く感じる復活祭でした。

2020/04/16（封書）、小野久美（団員、アルト）

……コロナですべて自粛ということになってしまいました。自分の事情からも、5月からの練習も出られるかどうかわかりませんが、7月に演奏予定だった4曲のCDはよく聴いております。12月のクリスマス・オラトリオは、ぜひ歌えるように願っています。

事務局より

「3密」とやらで、人と人との接触が避けられるなか、当合唱団でも「オンライン」の活用は必須になってきました。会話が封じられても、手紙があるさ、電話・ファックスがあるさ、メールがあるさ、そのうえ、今日（5/9）の臨時相談会は、ZOOMを駆使しての開催です。はあはあ云いながらついて行くのが、精いっぱいですが……。

2021 年前半(*)の上演候補曲解説 [2]

大村 恵美子 (主宰者)

*) 執筆時の想定

「これを書き出そうとする今は、2 月初旬、やっと現 2020 年の方針が具体化してきたばかりのところですよ」(月報 3 月号、No. 693) と書きましたが、この事態で、いつ実現に至るのかは、不明です。候補の全 4 曲は、下記本文での記載以外に、

①カンタータ第 158 番《安らかにあれ おののく心》

Der Friede sei mit dir BWV 158

②カンタータ第 94 番《いかに世を問わん》

Was ich nach der Welt! BWV 94

①、②の解説は、月報 4 月号 (No. 694) の、連載 [1] 参照。

③カンタータ第 115 番《備えよ心 目覚め 祈れ》

Mache dich, mein Geist, bereit BWV 115

【用途】三位一体節後第 22 日曜日

【初演】1724 年 11 月 5 日

【福音書】マタイ 18 : 23-35 (「仲間をゆるさない家来」のたとえ)

【歌詞】作者不詳 (コラール・カンタータ)。J. B. フライシュタインの同名コラールを基本とする。1)、6) はコラール第 1、10 節。2) ~5) は同第 2~9 節の書き替え。

【編成】SATB、合唱、hn、fl、oba、vcp (ピッコロ・チェロ)、弦、通奏低音 (22 分)

1. 合唱：「備えよ心 目覚め 祈れ」。コラールカンタータの定番の手法として、8 部分に句切ったコラール詩節を、ホルンとソプラノ声部が提示し、下 3 声部がそれを穏やかに支える。フルート、オーボエ・ダモーレ、弦の楽器群も、自然な進行で前奏・間奏・後奏。冒頭にまず、落ちついた心構えを促すことから始まる。ト長調、6/4 (4 分)

2. アリア (A)：「ああ 眠る魂よ いかになお休む?」。アダージョから、眠る魂を、警告で揺さぶり起し (アレグロ)、永遠の死に葬り去られぬように、とアダージョで諄々と諭して終わる。ホ短調、3/8 (9 分)

3. レチタティーヴォ (B)：「主 なが魂まもり」。この世の邪悪な誘いを見分けて、神の恵みによりサタンに屈せぬように、と叱咤激励。通奏低音 (1 分)

4. アリア (S)：「祈れ 目覚めて祈れ」。内心の覚悟を現わす、モルト・アダージョの深い感動。横フルートとヴィオロンチェロ・ピッコロという組み合わせのオブリガートの旋律的な豊かさ。ロ短調、4/4 (6 分)

5. レチタティーヴォ (T)：「主 我らの叫びに 耳傾けたもう」。続く喜びのレチタティーヴォは、短いが興奮さめやらぬテノールの声で、勝利の主、アリオージのしめくり。通奏低音 (1 分)

6. コラール：「つねに目覚めて 祈り求めよ」。1) 合唱で整然と提示されたコラールが、ここでも「神の審き 世の滅びは遠くあらじ」と、最終節を慎重に歌って終わる。(1 分)

21 世紀に入って、地球上の各国が「おれひとり」とエゴイズムを剥きだしにし始めた。現在の墮落ぶりが、今回のプログラムの②③で、まるでバッハが見ているかのような、生々しきで指摘される感じ。その人類の上に、意表をついたコロナウィルスの蔓延も、天の激しい警告ではないのか? ここで目覚めて、④のような境地までに、心一つにして向かうのでなければ、滅亡しかない――。

④カンタータ第 16 番《主 頌め歌わん》

Herr Gott, dich loben wir BWV 16

【用途】新年

【初演】1726 年 1 月 1 日

【福音書】ルカ 2 : 21 (イエスの割礼と命名)

【歌詞】G. Ch. レームス 1711 年。

【編成】ATB、合唱、Corno da caccia、ob2、obc、弦、通奏低音 (20 分)

【団の演奏歴】2000 年、2016 年、出版譜あり

1. 合唱：「主 頌め歌わん」。ラテン語の讚美誦の「テ・デウム」のドイツ語訳 (M. ルター)。新しい年に神の恩寵を感謝し、平安を祈る。喜びのモチーフ ♪♪ が通奏低音で始めから終りまで続いて、新年を明るく、かつ荘厳な感じで迎える気持ちをあらわし (ヴィヴァーチェ)、ソプラノ声部とホルン・ダ・カッチャ (狩のホルン) とが、各 4・5 小節に引きのばしたコラール旋律を、4 回に分けて、朗々と奏する。下の 3 声部は、通奏低音の ♪♪ と合わせた対位旋律を生き生きと歌い、最後の「誉れ あまねし」に向かって視野をひろげてゆく。イ短調、4/4 (2 分)

2. レチタティーヴォ (B)：「この喜ばしき時」。新年に、神のこの祝福に対して、こちらも新しい歌に託して感謝を献げようと促す。通奏低音 (1 分)

3. アリア (B) / 合唱：「声あげ 喜ばん」。2) のレチタティーヴォに誘われて発せられる新しい歌は、バス独唱と合唱とが交互に歌いかわす、3 和音音型の解放的な歓喜の歌である。楽器も 4 分音符から 32 分音符をあれこれ取りまぜて、音域も思いきり広い範囲を飛びまわり、歓喜の極致を表現する。Corno da caccia (狩のホルン)、ob2、弦、通奏低音。ハ長調、4/4 (4 分)

4. レチタティーヴォ (A)：「尊き言葉」。当カンタータにはソプラノの曲がなく、このレチタティーヴォが唯一の女声によるもの。内容は、6) の最終コラールと似て、新しい 1 年間も、神の民に祝福と平和が与えられるように、と落ち着いた声で深々と訴える。通奏低音 (2 分)

5. アリア (T)：「愛するイエス なれのみ わが魂の宝」。それと対照的に、10 分も要するこのアリアは、テノールが若々しい声で、慕わしげにイエスへの呼びかけをくり返し歌い、「いのち絶ゆるとき いまひとたび 口もて歌い出すべし」と、最後の日まで熱く寄せるイエスへの愛を訴える。狩のオーボエが、そのテノールに寄り添って、しっとりとしたダ・カーポ・アリアを印象づける。初演時のオーボエ・ダ・ガッチャは、晩年の再演 (1749 年) ではヴィオレッタ (ヴィオラもしくは高音域のガンバ) に変更されたそうだが、私たちが演奏する場合、どの楽器とするかは、現時点ではまだ未定。ハ長調、3/4 (10 分)

6. コラール：「み恵み讃えよ 天なる父」。P. エーバー「われと共に 神の慈しみを讃えよ」Helft mir Gottes Güte preisen (1580 年頃) 第 6 節 [#48]。新しく迎える年の平安を祈る、素直なコラール。イ短調、4/4 (1 分)

偶然にも、コロナウィルスの世界制覇に、驚き悩むわれわれ人間の現状にびつたりの選曲となってしまった。オリンピックに浮かれつつあったところに、未曾有の病魔攻撃。④の喜びをとり戻して 2021 年を迎えられるのかどうか。いずれにしる、切羽つまった演奏となるのでは……。

<了>